

開 会 挨拶

シンポジウム①

立命館大学 学長 川口 清史

みなさま、ようこそお越しくださいました。立命館大学長の川口でございます。衣笠キャンパスは、多くの文化遺産に囲まれ、歴史都市・京都を感じて頂ける立地でございますが、1,000名近い方々が一堂に会していただく場所を持ち合わせておりませんで、このように大変不都合なことになりましたので申し訳ございません。私も卒業式を1回できませんので学部ごとに分けて式典を執り行っています。どうぞご了承を頂きたいと思います。今、木野教授からもありましたように大学コンソーシアム京都のFDフォーラムは18年目を迎えました。当初はもちろん京都の大学の集まりとして始めたわけですが、今や全国の方々にご参加いただき、まさしく全国のFD活動のセンターになってきています。コンソーシアム京都としてはいささか力にあまる所もあるのではないかと、私は副理事長もやっておりますのでそんな感じもありますけれども、しかしながらとても大きな取り組みとして全国のFD活動にいろいろな形で寄与できていると大変うれしく思うところであります。これまでの教育改革の重要な柱として「教育の質の保証」が挙げられます。社会的に教育の水準を明らかにし、質の保証の仕組みを作ること自体もちろん大事でありますけれども、近年では質の中身が問われています。

それはなによりも学生たちの学びこそが問われなければいけない。おそらくこういっただことが今の大学教育改革のポイントであり、それを教員がどう実現していくか、教員の目線だけではなく学生の目線からの教育改革こそが今の大きな課題であります。このような意味でも今年の「主体的な学び」というテーマは非常に意義のあるものと思います。私たち立命館大学も2020年を目指した新しい大学作りに取り組んでいますが、その第1の課題は「教育の質向上」であり、内容は「学生の主体的な学び」、「学習主体者としての学びの成長」であります。そのための教育の仕組み、学修環境をどのように作っていくかを議論し実践を続けています。私たちのささやかに積み上げてきた取組もまた、皆様にご提起できることがあるかと存じます。また皆様の様々なお活動・ご活躍を是非多くの京都の教職員、とりわけ我が立命館の教職員が学ばせて頂ければ会場校としてはこれまでの喜びはないと思います。この2日間、活発なご議論を展開して頂き、日本の大学改革の新しい一歩を築くその一代になっていただければ大変うれしく思います。どうぞ皆様、様々なお提案を寄せて活発な議論をして頂きたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。

開 会 挨拶

シンポジウム②

立命館大学 副学長 見上 崇洋

皆さんこんにちは。ご紹介を頂きました、学校法人立命館副総長、立命館大学副学長の見上でございます。会場校を代表しまして一言ご挨拶を申し上げます。この衣笠キャンパスというのが周辺に金閣寺、あるいは龍安寺、すぐ南に等持院という非常に風光明媚なところがございます。とは言いましてもキャンパス自体はすこし古くて狭くてさまざまなご不便をお掛けするかと思いますけれども、その辺はご海容の程をお願い申し上げます。ここ衣笠の地に本日は1000名を超す様々な関係者の方にお集まりいただきまして、「第18回FDフォーラム」を開催できましたことを会場校代表としまして喜んでおります。大学に対する社会からの期待というのは、社会に直接出る機会の多い大学生を育てるということも当然ございまして、さまざまな角度からの期待があり、その社会が複雑になるにつれ、大学に対する期待も多様化してきているところです。そういった中で、例えば昨年夏には、中教審の答申、さらに文科省の大学改革の実行プランというようなものも出されてきていますが、大学の教学に対する新しい展開を期待するという上では共通しています。ただ内容につきましては、文科省にしろ、中教審にしろ、それぞれ具体的な中身を展開するには至っていません。大学側もさまざまな具体的な詰めをしていかなければ、本当の学生のための教学は展開しづらい状況が続いているのではないかと感じております。FDという言葉が、20年前ぐらいから流行ってと申しますか、一般に定着してきている中で、その中身につきましては、普段の意見交換、情報交換、経験交流を通じてでない、次の新しいステップになかなか踏みだせないことが続いています。ただそういうことを通じて、ほんの少しではありますがそれぞれの大学が、あるいはそれぞれの教学機関が進歩することができているのではないかと申すように、こういう場で確認、確信できればと願って

おります。立命館では2020年に向けて、大学の改革プランを作ってきました。「Creating a Future Beyond Borders 自分を超越る、未来をつくる。」ということで、自分の壁、あるいはさまざまなディシプリン等の壁を越えながら、あるいは社会体制の壁を越えながら新しい社会を創っていくのではないかと申すことで、その中の最大の目標を教育の質の向上ということ掲げて取り組んでいるところです。ただこれも言うは易しでございまして、内容をどう作るのかという事については、本当に様々な角度から七転八起と言いますか、様々な苦勞を重ねつつあるところです。本日のこういう機会を我々もお借りして、新しい教学のあり方といったものに更にチャレンジしていく機会にしたいと思っております。特に教学のところでは、関わる主体が多様化しているわけですが、本日のこのシンポジウムのテーマのように、学生というのが利益を享受する主体でもありますので、その立場からどう展開できるのかを常に見据えていかなければいけないと思っております。この2日間のフォーラムを通じて、それぞれ何かを持って帰っていただき、また次の機会に何かを持ち寄っていただいて、お互いに飛躍できるような機会にしていきたいと思います。最後になりますが、実は私、大学コンソーシアム京都の運営委員会の委員長というのにも仰せつかっております。そのプロセスの中で、本日のFDフォーラムの申し込みが非常に早い段階で満杯になっていることを聞いておりました。事務局からそのような報告を受けまして、大学関係者、社会一般からこういう機会が本当に望まれているのだと確信し、それは問題の大きさに比例していると改めて痛感しております。このフォーラムにおきまして、新しい出会い、新しい議論、そして実り豊かな成果が出ますことを期待しまして、会場校を代表しましての挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

開 会 挨拶

立命館大学 共通教育推進機構 木野 茂

こんにちは。立命館大学の木野です。先ほど紹介されましたこのFDフォーラムを企画いたしました企画検討ワーキングの委員長を務めさせていただきます。本日のこのFDフォーラムはご覧の通り第18回目を迎えております。ということは18年という意味があるわけですが、FDと言われるともうここにおられる方は十分にご存知かと思えますけれども、1991年の大学設置基準の大綱化から始まり、1998年に努力義務化というのを経て2008年に完全義務化となり、今やどの大学でもFDは行われているという状況になっております。それを受けて最近のFDというのは以前のようにFDを実施するかどうかではなく、その実施の目的である改革がどれだけ達成されたかを求めるようになっていきます。例えば中教審答申が何回か出されていますけれども、その中で最近「大学教育の質的転換」というキーワードが強く強調されるようになりました。昨年の夏にも最近の答申が出されましたが、その中ではそれに加えて「学生の主体的な学びの実現」という目標も示されました。このFDフォーラムをやってきた大学コンソーシアム京都では、もともと学生の町京都ですから当初から学生の学びの充実を目指してフォーラムを重ねてきましたが、この状況の中で今回はここにもありますように『学生が主体的に学ぶ力を身につけるには』という統一タイトルにいたしました。

ところでこれまでにFDフォーラムは1つの統一テーマを元に1つの会場で全体会を行ってききましたが、ここ最近では1000人という規模の参加者になってまいりましたので、なかなかフロアと報告者、パネリストとの双方向的な場の確保が難しくなってきました。そういうこともあわせて今回はこの統一タイトルを元に、2つの切り口からシンポジウムを設定することに致しました。1つ

は1号ホールで行われる「主体的な学びを支える仕組みについて考える」ということで、これは大学の授業だとか教員組織だとか、あるいは学生支援だとかいう様な大学教育の根本に関わる問題ですが、これを今日は中教審の答申にも関わられました濱名先生を始め3人のシンポジストの方々と交えて展開して頂けることとなりました。もう一つは2号ホールで行われる「学生とともに進めるFD」です。学生FDという言葉はあまり聞きなれない方も多いと思いますが、FDというのは教員、職員が中心になって進めてきましたし、そう思われていますけれども、これに学生が主体となって関わるということを考えたときにどうなるかを今日は事例報告を交えて行って頂くことになっております。この2つのシンポジウムを同時並行で開催いたしますことをご了承頂きます様、お願いを申し上げます。

それから明日2日目は例年通り分科会を行います。今回も合計13の分科会を用意しております。コーディネーターの委員はできるだけ双方向的な議論ができるよう努める所存ですが、是非ご参加の方々もご協力をお願いしたいと思います。更に新しい試みとして明日、2日目はポスターセッションを展開させていただきます。今回は大学コンソーシアム京都に加盟している大学の中から、特徴的なFDの取り組みを15発表していただきますので是非、足をお運びください。このように豊富なプログラムを用意しましたが是非この2日間の成果を各大学に持ち帰られて今後の各大学のFDの取り組みに活かしていただければ我々主催者として幸いかと存じます。以上簡単ではありますが主催者を代表しまして開会の挨拶とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございます。

